

入江長八と大分に残る鍔絵

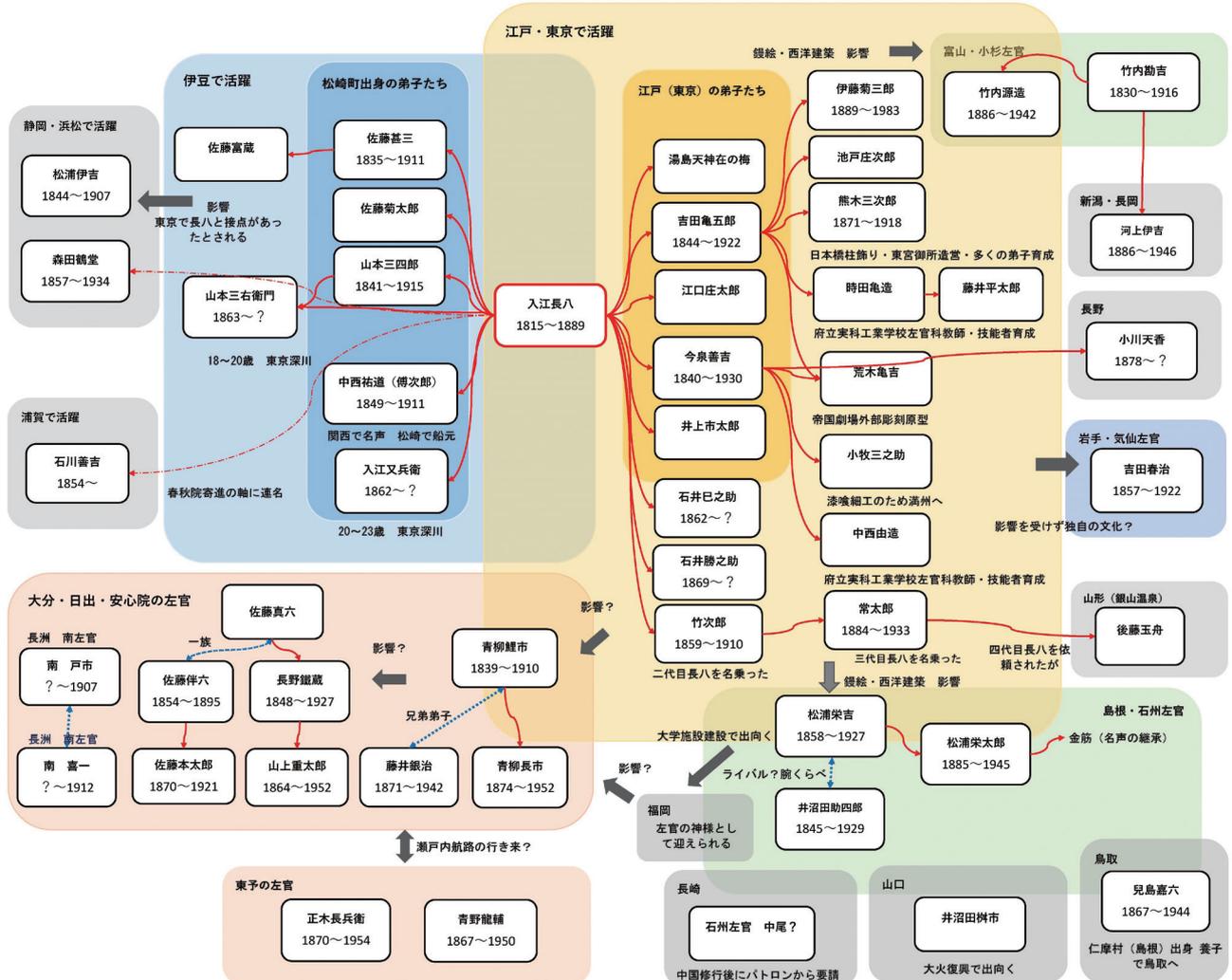
第4回 左官の系譜と鍔絵の広がり

東京都立大学 プレミアム・カレッジ 本科・専攻科修了
一級建築士 立川 公彦

1. 弟子たちへの伝承

師弟関係は、技を伝えることを目的としています。師自ら制作の場を見せるとともに、弟子による制作や心構えを直接指導するもので、最も効果的に伝承できる方法です。鍔絵は、入江長八からどのように伝承されたのでしょうか。長八は、東京や伊豆松崎町に多くの弟子を持っていました。弟子と言っても一般的な師弟関係の他、兄弟分としての関係など

様々で、自称「長八の弟子」も相当数いたようです。東京では、「五人男」や「四天王」とよばれた長八の弟子たちへの流れがあります。さらに長八の養子で二代目入江長八を名乗った竹次郎から、その息子で三代目を名乗った常太郎に伝承されました。常太郎は大正期に東京左官職組合（現在の日左連）の要職を担いました。長八の出身地伊豆松崎町の弟子たちにも伝承されました。自ら二代目長八を名乗った中西祐道、佐藤甚三、山本三四郎などです。東京で



↑ 図1 鍔絵名工の連関図



↑ 図2 制作：吉田亀五郎・明治33年・須賀神社所蔵



↑ 図4 制作：松浦栄吉・大正・島根県西性寺

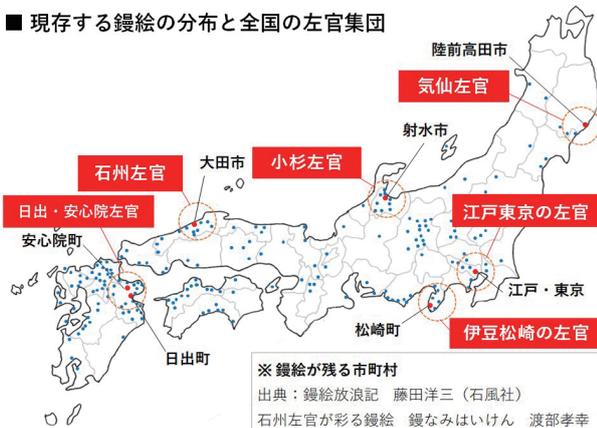
の接点から浜松の松浦伊吉に、長八の旅先では、教えを乞うた静岡の森田鶴堂に伝えられたこともあり、常太郎から山形銀山温泉で鍔絵を残した後藤玉舟に、今泉善吉から長野の小川天香に伝承するなど、長八の弟子たちはさらにその弟子に鍔絵の技術を伝えていきました。

高弟と言われた今泉善吉や吉田亀五郎、さらに孫弟子たちは、残念ながら長八の領域に至るような鍔絵作品は残していません。しかし彼らはさらにその弟子たちを育て、左官職の近代化とともに、明治期以降の西洋建築による東京の新しい街づくりに大きく貢献していったことを申し添えておきます。

2. 江戸・東京の流行から全国への広がり

意図しなくても、現場での作業を共にすることで伝わる場合があります。明治期に建てられるように

■ 現存する鍔絵の分布と全国の左官集団



↑ 図3 鍔絵の分布と全国の左官集団

なった大規模な西洋建築は「野丁場」となり、出稼ぎや修業として地方から多くの左官が集まっていました。富山県の小杉左官には、若くして旧帝国ホテルの貴賓室を仕上げたとされる竹内源造がいます。さらにその父親である竹内勘吉から長岡の河上伊吉への流れがあります。また、小杉左官の人たちは、冬場で左官作業ができない期間、鍔絵の奉納額の依頼を請け、故郷の寺社に多く納めています。島根県の石州左官も明治期の建築近代化を担った左官集団です。石州左官の松浦栄吉は故郷に鍔絵を伝えるとともに、満州・朝鮮や九州の建築工事にも出張し、「野丁場」を介在しての様々な左官たちとの交流で、鍔絵が伝えられたのではないかと思います。

鍔絵が衆目に晒されることによる広がりもあったのではないかと考えられます。長八の作品は個人所有の内装や額装が多く、容易に見ることはできませんが、なかには寺社に奉納したものもあります。一方、地方に伝わった鍔絵は、建物外部に設置されたものや神社仏閣に奉納された作品が多く、容易に見ることができることから伝承の元となったと考えられます。大分の左官、青柳鯉市も江戸での修業期間に長八の鍔絵を見る機会を得たことは十分考えられます。左官職人である鯉市は、それを故郷の日出に持ち帰り、自分なりに実践したと考えられます。気仙左官の吉田春治も江戸での長八やその弟子たちとの接点ははっきりとしませんが、鍔絵制作に必要な腕を素養として持っている左官が、他の作品を見聞きすることで刺激を受けて、それぞれの地域で鍔絵作品を制作したと考えられます。

〈次回は、青柳鯉市の生涯を掘り下げます。〉